

健やか未来都市ちばプラン 最終評価報告書 (抜粋)



令和5（2023）年3月
千葉市

6 歯・口腔の健康

(1) 健康目標の数値推移と評価

悪化した指標が2割あったものの、6割の指標で目標を達成し、全体としては概ね改善に向かいました。

評価	項目数
◎ 目標を達成している	6 (60.0%)
○ 目標に向かって改善している	0 (0.0%)
△ ほぼ変化なし	2 (20.0%)
× 悪化している	2 (20.0%)
— 現時点では評価できない	0 (0.0%)

No	指標	ベースライン	目標	中間値	最終値	最終評価	出典
1	3歳児でう蝕がない子どもの割合の増加	77.1% (H23年度)	90%以上 (R4年度)	83.6% (H28年度)	90.8% (R3年度)	◎	V
2	12歳児でう蝕がない子どもの割合の増加	68.4% (H28年度)	増加 (R4年度)	— (H29変更)	77.6% (R3年度)	◎	c
3	60歳代における咀嚼良好者の割合の増加	71.5% (H24年度)	80% (R4年度)	77.5% (H28年度)	81.4% (R3年度)	◎	J・K
4	70歳で22歯以上の自分の歯を有する人の割合の増加	75.7% (H23年度)	増加 (R4年度)	78.4% (H28年度)	83.4% (R3年度)	◎	W
5	60歳で24歯以上の自分の歯を有する人の割合の増加	84.4% (H23年度)	増加 (R4年度)	87.3% (H28年度)	91.3% (R3年度)	◎	W
6	中学2年生における歯肉に炎症所見を有する子どもの割合の減少	29.3% (H28年度)	25% (R4年度)	— (H29新規)	23.1% (R3年度)	◎	c
7	20歳代における歯肉に炎症所見を有する人の割合の減少	28.9% (H24年度)	25% (R4年度)	35.8% (H28年度)	30.0% (R3年度)	△	J・K
8	40歳代における進行した歯周炎を有する人の割合の減少	39.4% (H23年度)	25% (R4年度)	47.7% (H28年度)	45.7% (R3年度)	×	W
9	60歳代における進行した歯周炎を有する人の割合の減少	49.2% (H23年度)	45% (R4年度)	57.4% (H28年度)	54.4% (R3年度)	×	W
10	過去1年間に歯科検診を受診した人の割合の増加	54.9% (H24年度)	65% (R4年度)	56.9% (H28年度)	58.3% (R3年度)	△	J・K

(2) これまでの主な取組み

生涯にわたる歯や口腔機能の維持・向上のために、行政・市歯科医師会等、職域や地域における関係機関・団体等と連携し、次のように歯科口腔保健の推進に取り組みました。

- ヘルシーカムカム、健康づくり大会等各種イベントにおいて、歯科口腔保健について普及啓発を行いました。
- 妊産婦歯科健診、乳幼児歯科健診、学校歯科健診、歯周病検診、口腔がん検診、口腔ケア事業等、ライフステージに応じた各種歯科健診・検診を実施しました。
- 4か月児健康診査会場において、妊婦歯科健診で未治療のう蝕を5歯以上有する方に対し、歯科治療の必要性及び歯周病予防について周知し、若い世代からの歯と口の健康づくりの推進に努めました。
- 出産から10か月までの間に産婦歯科健診を受診していない方に受診勧奨を行い、受診者の増加を図るとともに、定期受診の重要性について啓発を行いました。

- 幼児歯科健診や2歳児むし歯予防教室等において把握したむし歯多発傾向者を対象として、歯科医院の受診勧奨やむし歯予防の情報提供など、継続的に支援を行いました。
- 乳幼児歯科相談、保育所、幼稚園や育児サークル等の口腔衛生指導等を通じて、子どもや保護者へのむし歯予防の正しい知識や技術の普及に努めました。特に、フッ化物応用（フッ化物配合歯みがき剤の使用・フッ化物歯面塗布・フッ化物洗口）を積極的に勧奨しました。
- 小・中・特別支援学校において、毎年各学校から希望を募り、歯科衛生士が学校を訪問し歯みがき指導を行うとともに、市歯科医師会と連携し、毎年2～3の中学校区の小中学校の全学級で歯科医師が直接歯科保健指導を行い、児童生徒及び教職員等による口腔衛生の重要性への理解促進と生涯を通じた自立的口腔保健行動の形成を図りました。
- むし歯予防の取組みのひとつとして、保育所や学校での集団フッ化物洗口の導入を進め、実施施設数の増加に努めました。
 - ・保育所、幼稚園、小・中・特別支援学校等の教職員へ向けた集団フッ化物洗口の講習会や連絡会を実施し、正しい知識や技術の伝達講習を行いました。
 - ・円滑な集団フッ化物洗口の導入と実施のために、技術支援・教職員説明会・保護者説明会等を実施しました。
 - ・未就学児の集団フッ化物洗口実施施設は、公立と民間を合わせて9施設となりました。
 - ・市歯科医師会と市教育委員会の協働による集団フッ化物洗口モデル事業を進めました。平成27年度より小学校3校で洗口を開始し、令和4年度までに実施校は小学校7校となりました。
- 歯科衛生学科のある市内の大学と連携し、学生作成の歯周病予防ポスターを大学構内に掲示し、若い世代からの歯周病予防について周知啓発に取り組みました。
- 成人歯科相談、糖尿病や介護予防の観点からの歯科健康教育や講演会、歯っぴー健口教室等の各種保健事業を通じて、現役世代や高齢者に対して、歯科保健についての正しい知識や技術の普及に努めました。特に、かかりつけ歯科医を持ち、定期的に歯科検診を受けること、むし歯や歯周病の予防のために、通常の歯みがきに加えて歯間ブラシ等の歯間部清掃補助用具を使用すること、口腔機能の維持向上のために口腔体操を行うこと等、口の健康を保つための具体的な方法を伝達しました。
- 歯周病検診については、平成30年度より対象年齢を40から70歳の10歳刻みから5歳刻みへと拡大しました。また、はがき発送による受診勧奨を行い、検診受診者の増加に努めました。

（3）評価に係る分析

- 子どもに関連する3つの項目で目標を達成したのは、歯みがきの習慣化やむし歯・歯周病予防の啓発、フッ化物応用の普及などの取組みのあらわれと考えられます。
- 成人では、60歳代における咀嚼良好者の割合、自分の歯を60歳で24歯、70歳で22歯以上有する者の割合が増加し、目標を達成しました。歯を多く保有する者が増えたことに伴い、咀嚼良好者の割合も増加していったものと考えられます。

- 成人の歯周病を有する者の割合では改善が見られず、40歳代と60歳代で進行した歯周炎を有する人の割合は有意に増加しました。
- 過去1年間に歯科検診を受診した人の割合は、数値は増加したものの、変化の幅が有意な水準に至らず、ほぼ変化なしとの評価となりました。

(4) 今後に向けての課題と取組みの方向性

上記(2)及び(3)を踏まえて、これまでの取組みを引き続き推進するとともに、以下のように取り組むことが必要と考えられます。

- 平均寿命の延伸に伴い、健康な自分の歯をより長く残すことの重要性が増しています。高齢期を迎える前の就労世代から、歯周病検診及び歯科検診の定期的な受診や日常のケアの重要性を認識できるよう、周知啓発の強化を図ります。
- むし歯予防効果が高いとされる集団フッ化物洗口について、小・中・特別支援学校や保育所、幼稚園等における実施施設を増やすため、市の関係各課及び関係機関との連携を強化し、円滑な導入支援に努めます。
- 高齢者の口腔機能の虚弱（オーラルフレイル）について、介護予防教育や「高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施」などにおいて予防・対策の取組強化を図ります。